平鹿地域研究の経過

調査研究委員会

I はじめに

秋田県立博物館は1975年5月,人文科学系5部門, 自然科学系2部門の総合博物館として開館した。それ 以来当館では,秋田県内の特定の地域を選び,各部門 が共同してその地域を総合的に研究するという試み(地域研究)を続けている。地域研究が行われるように なった経緯については,すでに『秋田県立博物館研究 報告第3号』に述べてあるので省略するが,その意義 については次のように考えている。

1972年,『秋田県立綜合博物館設立構想』に当館設立の基本理念が示されている。それを要約すると,「秋田県立綜合博物館は,従来の諸学の寄せ集め的総合博物館ではなく,秋田郷土を自然史的人間史的に綜合した,郷土学的綜合博物館であるべきである」ということである。われわれは日常,この基本理念をふまえた館活動をするように心がけているのであるが,地域研究こそ最もよくそれを具体化するものであろう。なぜなら,地域研究においてのみ,全部門が共通の対象をもって研究を進めることができるのであり,郷土が総合的に究明されると考えるからである。

これまでの地域研究をふり返ってみると、1975年から77年にかけては鹿角地域を研究対象とした。鹿角地域研究においては「十和田火山灰と南部要素」という大テーマをかかげたが、中・小のテーマは特に決めず、各部門の自主性にまかせた。その結果、総合化という点では必ずしも所期の目標を達したとはいいがたかった。

1977年から79年にかけては鳥海山麓地域を対象とした。前回の反省に基づき、この研究では最初にいくつかの中テーマを決め、その下に各部門のテーマを設定した。結果としては、一部の中テーマにおいてわれわれの目ざす総合化が達成されたが、全体としてはまだまだ不完全なものであった。

1980年以降は平鹿地域を対象とした。この研究では前2回の地域研究の反省をふまえて、研究の進め方に少なからぬ工夫をした。本稿でその概要を報告するが、研究過程において研究計画の立案・推進役を務めた調査研究委員が、おのおのの分担したパートを執筆するという形式をとる。

なお地域研究の成果は、その都度展示(地域展)や 博物館教室で公開しているほか、研究報告誌上にも報 告している。

Ⅱ 研究の視点と経過

平鹿研究の研究テーマはすでに1975年に提案されている。当初は、「雪と横手盆地」をタイトルとし、「里」を主テーマとするものであった。研究対象地域は横手盆地全域であった。1979年3月には、「横手盆地一雪と稲作一」として修正提案された。主テーマを「雪と稲作」に焦点化された。なお、この時点においても研究対象地域は横手盆地全域となっていた。

しかし、地域研究プロジェクトが具体的に動きだした1980年4月に、調査研究委員会が中心に検討した結果、研究対象地域を増田町・平鹿町・雄物川町・十文字町・大雄村の4町1村とし、主テーマを「水」とする総合研究とした。その理由として、横手盆地は東西最大幅15km、南北60kmに及ぶ極めて広大な地域であること、秋田県の五大地域区分(日本地誌研究所版)の一地域として位置づけられる横手盆地ではあるが、大曲・仙北、横手・平鹿、湯沢・雄勝の三地域にそれぞれ地域差があり、郷土学一地域論一の展開にあって、ことに総合化の方法において極めて困難であること、などがあった。一方、「雪」に関する研究は不可欠のものであることが確認されたものの、具体的研究にあたってその方法・研究期間など隘路があり、その困難性を指摘する意見が多く、問題点として検討されること

調查研究委員会

になった。平鹿研究を推進するにあたって、雪を水の概念に包含するということを確認するにとどまった。 水の循環の観点からみた場合、研究対象地域における 山地の扱いについても論議された。しかし、結果的に は1975年の主テーマ「里」(盆地床)に限定すること になった。なお、大森町・山内村・横手市に関しては、 展示の段階で考慮することにした。

「水」を主テーマとした研究方法に関しては、農業 社会を基盤とした水の多面的利用を根幹とした。水とそ の自然・水の利用・水の信仰(心)の三要素から、近 世から近代にかけての平鹿の歴史的風土にアプローチ することにした(図1)。

水の多面的利用に関しては、地形的に扇状地・氾濫

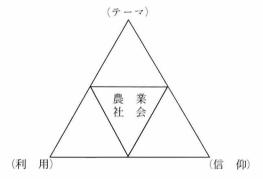


図1 平鹿研究の基本的構想

原(泥炭地)・河川に類型化した。扇状地の湧水とそ の質的利用・氾濫原の泥炭とその結果的利用・河川(雄物川) とその水力利用を視点として、総合化の方法 をとった。その際に、農業社会における米作りに関し ては地主制・農産物に視点をおいて、水の多面的利用 における「湧水」と「雄物川」, 「泥炭」と「湧水」, 「雄物川」の関連性を重視することにした。その相互 の具体的関連は図2に示した通りである。平鹿研究の 推進にあたって残された問題は「雪」の扱い方であっ た。平鹿研究において「雪」の意義は看過できないも のの研究の具体的展開において, 方法的にも時間的に も極めて困難であることが、特に自然部門において指 摘された。人文部門では展示の段階で考慮すべき意見 が支配的であった。結果的には, 「雄物川」領域の研 究において, 雄物川の水文学的資料の中で配慮するこ とになった。

研究体制としては、「湧水」・「泥炭(根子)」・「雄物川」の3グループを核として、展示を前提として、「文化財」と平鹿のトピカルな事象を調査する「トピック」グループの5グループで調査・研究グループを編成した。

1980年以降の研究経過の概要は次の通りである。

1980年5月:地域設定および平鹿に関する基礎的報告(資料:日本地誌一秋田県一,二宮

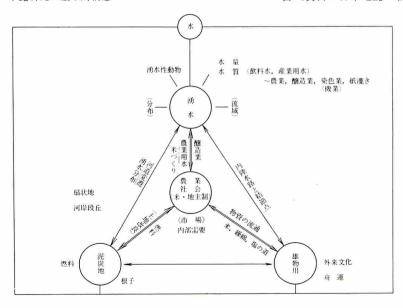


図2 水利用とその構造化

平鹿地域研究の経渦

書店版),

6月:平鹿巡検(2班編成)

8月:各部門より「平鹿研究の現状」についての報告(文献等提示)

12月:中テーマ設定および各部門より小テーマ提出・検討、

1981年3月:博物館協議会にて「平鹿研究のあり方」 について協議〜共同調査の方法について

5月:地域研究「平鹿」現地説明会(於:平 鹿町図書館)

8月:平鹿研究・中間報告会(本館)

講師·県立農業短期大学学長 藤 岡 一 男 氏

9月:平鹿展一水とくらしー,シナリオ素案 (半田案)提案

1982年6月:平鹿展一水とくらし一,第二次展示シ ナリオ案(益子案)提案 平鹿研究のまとめについて検討〜総合 化をめざしての方法論・研究経過を中 心として〜

展示関係資料リストアップ

7月:平鹿研究・第二回中間報告会 (本館)

8月:「平鹿の歴史的風土論」討議(本館)

9月:平鹿研究成果・現地報告会(於:平鹿 町就業センター)

10月:地域展「平鹿一水とくらし一」・レイアウト提案。

この間,学芸課職員は幾度となく現地調査にあたった。現地調査にあたっては、関係町村に調査協力員を委嘱し、調査がスムーズにできる体制をとった。かくして、地域展「平鹿一水とくらし一」に、3ヶ年間の研究成果を公開することができた。 (益子清孝)

Ⅲ 各グループにおける研究の視点と経過1 湧水グループ

湧水研究グループは, 6部門 (歴史・考古・民俗, 工芸・地質・生物) で編成された。

1980年12月に第一回湧水研究に関する打合せ会をも

った。その際,各部門が可能とする研究テーマが提示 された。各部門の研究概要は次の通りである。

歴史部門:湧水の利用に視点をおいて、米作り・地 主制・酒造業の地域的展開を考察する。

考古部門:地形・水とのかかわりから遺跡を考古地 理的に考察する。

民俗部門:清水信仰・水利慣行から地域的特性を考 察する。

工芸部門:正藍染 (浅舞絞りも含む)・紙漉きなど の伝統工芸を水一湧水一とのかかわりを 考察する。その際に,藍がめなどの平鹿 の塞業も考察する。

地質部門:皆瀬川・成瀬川の形成した扇状地の湧水 について、分布・景観・規模・水量・水 温・水質などを考察する。

生物部門:湧水性動物(トミヨ・イバラトミヨ)の 基礎的生息状況を考察する。

各部門が可能とする研究テーマをもとに次の点について確認した。

- (1) 各部門の共通テーマとして「湧水の利用」を観点とした調査研究を推進すること。
- (2) 湧水の利用にかかわる体系的・構造的考察をは かること。すなわち、多面的な湧水の利用を考察する にあたって、各部門間の相互の関係を緊密にし、地域 研究における総合化のための構造化をはかること。

以上の2点を確認したうえで、当面、基礎資料の収 集につとめることとし、特に湧水の水文学(自然科学的)的研究および湧水の分布確認に努めることとした。

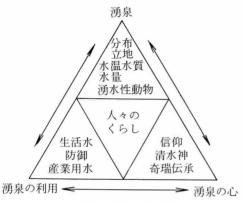
各部門から提示された調査項目をもとに、湧水の利用とその総合化および各部内間の有機的関連をはかるために「湧水の自然」・「湧水の利用」・「湧水の心」を三要素とする構造化につとめた(図3)。 おもな調査項目は図4の通りである。

1981年4月の段階で,主として湧水の多面的な利用に関する研究をどのように推進するか検討した。そのおもな要点として,

- (1) 湧水地点からの流域に、各部門の研究テーマが 系統的に総合化をはかる方法はないか。
- (2) ある特定地域に各部門の研究テーマを有機的に 関連づけることができないか。例えば、平鹿町浅舞地 区の湧水帯とその流域は対象地として可能ではないか。

調査研究委員会

しかし、現実的には両者は一体なものであって、特に限定する必要もない。むしろ各部門間の調査項目を有機的に関連づけて共同研究が推進されることに意義がある。そこで、各部門とも特に限定した地域設定をしないで、それぞれの研究テーマに沿って各部門間の関連をはかり相互の連携を保ちながら研究を進めた。



- (1) 湧水の利用とその総合化
- (2) 各部門間の有機的関連

図3 基本的な考え方

その一例として工芸部門における正藍染(平鹿町浅舞)について示したのが図5である。

1982年6月に各研究グループの相互関連および総合 化をはかるために次の点について確認し,平鹿研究の 推進にあたった。湧水グループに関しては,

(1)湧水と泥炭の関連について

湧水の分布は皆瀬川・成瀬川の河床の変遷との関連がある。特に河岸段丘の段丘崖下・扇状地の扇端・雄物川周縁の湧水は地形発達史の関連で考察する必要がある。

(2) 湧水と雄物川の関連

内陸水路と雄物川舟運との関連は,雄物川の河港を結節点とする物資の流通に求めることができる。 例えば小勝田川上流の御倉前(平鹿町下鍋倉)は内 陸水路の要所としての地名上の残象と考えられている。

農業用水として湧水の占める割合は大きい。穀倉 地帯における水利慣行は米づくりにとって欠かせな い要素であり、かつ、米づくりにおける地主制と密 接な関係にある。一方、米づくりと酒造業、地主階

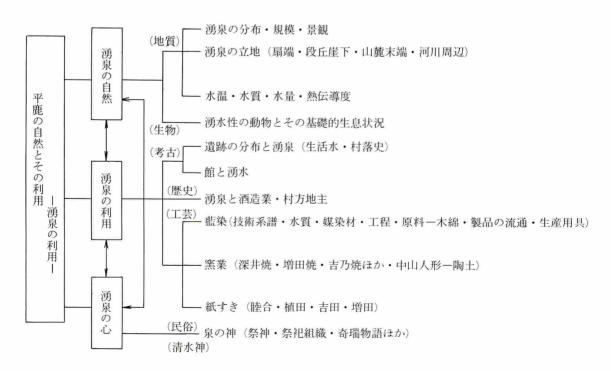


図4 おもな調査項目

平鹿地域研究の経過

級の物資の流入・流出は雄物川の舟運に依存してき たと考えられる。

以上のように、一応理念的には、6部門の有機的関連を維持すること、泥炭・雄物川研究グルーフとの関連性を保ちながら共同研究を通して総合化の方向性を模索するように努めた。しかし、

- (1) 湧水の自然では、ほぼ調査項目の調査は遂行できたが、水量の調査が技術的に困難であった。
- (2) 湧水の利用では
 - ・清水の分布と遺跡の分布は照合しえたが、中世 の館と清水との関連調査が困難であった。
 - ・酒造業の研究においては、水を接点として社会 科学と自然科学がそれぞれ独自の領域での研究 は本源的に困難である。
 - ・内陸水路の実態を知ることは資料的に困難であ る。

などの問題があった。

実質的な調査期間は1年余にすぎない。この短期間で地域研究の目的を遂行することは至難なことである。しかし、一応のまとめが必要であり、かつ、展示シナリオを作成し、地域研究の成果を展示することが必須条件である。本報告では、湧水グループの研究経過と研究の視点の概略を述べてきたが、最後に地域展「平鹿一水とくらしー」にどのように研究成果を具現したかその概要を記しまとめにかえたい。

◎清水の自然

- (1) 清水の分布・景観
- (2) 湧水性動物~トミヨ,イバラトミヨ~
- (3) 水質・水温 (解説資料に掲載)

〈工芸部門〉

調査項目 関連部門 関連グループ

・技術の系譜 ― 歴史 ― 雄物川
・水の利用 ― 地質 ― 泥 炭
・媒染剤
・原料(木綿・藍)――生物 ― 雄物川
― 販路 ― (流通) ― 歴史 ― 雄物川
― 製作工程(藍がめ他) ― 世質
~深井焼~ ― 【民俗

図5 平鹿町浅舞正藍染 (浅舞絞り) の調査項目と 他部門・他グループとの関連

- ◎清水の利用
 - (1) 湧水と酒造業
 - (2) 湧水と正藍染・浅舞絞り
 - (3) 湧水と紙漉き
 - (4) 農業用水とその水利慣行
- ◎湧水の心
 - (1) 清水神~祭神·祭祀組織
 - (a) 雨乞い行事

(益子清孝)

2 泥炭グループ

平鹿地方の平野部には広く泥炭が分布しており、地 元ではこれをねっこ(根木)と呼んでいる。この泥炭 を研究テーマとして取り上げようとした理由は、

- (1) 泥炭はごく最近の地質時代に形成されたものであ
- (2) 地域の人びとがかなり古くから主に燃料として利用してきた、ということなので、
- (3) 自然系の部門と人文系の部門とで総合的に研究するのに非常に適した対象であろう

と考えたからである。

ここでは平鹿地域研究の一部としての、泥炭研究の 研究経過を述べる。それは要約すれば、泥炭に関する 数多くの「小研究テーマ」を「総合化の視点」のもと に取拾選択しながら、総合的な研究に組み立てようと した過程である。

a 小研究テーマ

泥炭研究に参加できる部門としては、上記(1)の観点からは地質・生物の両部門、(2)の観点からは歴史・民俗の両部門であることが予想された。そこである程度予備調査等の進んだ段階で、1980年12月、この4部門の担当者が集って、それぞれの立場から予想される小研究テーマを自由に出しあってみた。このとき出されたテーマを、多少分類整理しあげてみると次のとおりである。

〈泥炭の利用にかかわる問題〉

- ・なぜねっこを使ったのか(燃料としてのねっこへの着目)
- ・ねっこには質の良し悪しがあるというが、それは どういうことなのか
 - ・燃料の種類はどう変化しているか
 - ・ねっこを使った地域の範囲は

調査研究委員会

- ・ねっこは売買されたが、どのような販売ルートがあったのか
 - ・燃料以外に利用されなかったか 〈泥炭の採掘にかかわる問題〉
 - ・採掘用具は歴史的にどう変遷したか
- ・採掘に際して、入合地や組合のような組織あるい は採掘権のようなものはなかったのか

〈泥炭地の利用にかかわる問題〉

- ・採掘した跡は水田になっているが、収量等は非泥 炭地と比べてどうなのか
 - ・水田にするにあたっては客土などはしたものか
- ・ホッフが盛んに栽培されているが,これは泥炭地 に適するのか
- ・各時期の5万分の1地形図によって土地利用の変化を調べることはできないか

〈自然物としての泥炭にかかわる問題〉

- ・泥炭の水平分布, 垂直分布, 性質はどうか
- ・泥炭がなぜこの地域にあるのか(成因)
- ・泥炭地には現在特殊な植物が生育しているのでは ないか

〈その他の問題 (水に関して)〉

- ・泥炭地では飲料水はどうしたのか
- ・泥炭地の稲作において、灌漑用水をどうしたか

b 総合化の視点

以上のようにきわめて多岐にわたる問題が提起されたので、次の課題は、このグルーフの研究が当初のねらいどおり自然系と人文系の総合的な研究になるように、上記の問題を整理して組み立てることである。その際、いわば総合化の視点ともいうべきものが必要でであろう。これをこのグルーフでは「泥炭地における農業」とした。この視点を選んだ理由は二つある。

一つは、この地域において泥炭を採掘した跡がことごとく水田化されている事実に関連する。泥炭を採掘してもその層は厚いので基底まで採掘しつくしてしまうわけではない。したがって新たな水田は泥炭の上につくられることになる。また最近は未利用地だった泥炭地が、国営のバイロット事業等により広大な水田になってきている。本来稲作にはあまり適しないはずの泥炭地が、次つぎに水田化されている事実によって、当地域が基本的に農業社会であることを強く印象づけられたのである。

二つ目の理由は、平鹿地域研究のメインテーマが「水」になったところにあった。湧水、雄物川という他の中テーマに比べると、泥炭というテーマは直接水とのかかわりがうすい。平鹿地域研究が総合研究であり、三つの中テーマがいずれは総合化されなければならないとすれば、泥炭というテーマにおいても水とのかかわりあいを考えておかなくてはならないであろう。そこで農業ということを視点にしておけば、農業には欠かせない灌漑等の問題から、他の中テーマに関連させることが可能になろう、と判断したわけである。

なお、総合化の視点はあくまでも視点であり、これが直接究明される対象になるわけではない。泥炭グルーフのメンバーは、それぞれがたとえば部門という独自の立場で調査研究にあたるが、常に自分の調査研究の中に「泥炭地における農業」ということを意識し、この観点から自分の調査研究をながめかえしてみる、ということなのである。

C 総合研究としての組み立て

小研究テーマと総合化の視点がそろったので、次に総合研究としてどう組み立てるかを考えることになる。この際、このグループの一員として活動できる職員の数とその専攻する分野、および研究に費やすことのできる時間などの現実を無視することはできない。実際に、当初参加を予想された部門のうち、民俗部門は他の研究テーマとの関係で泥炭グルーブから抜けることになった。

こうした現実もふまえたうえで、研究内容(小研究 テーマ)を次のように限定した。

(1) 泥炭そのものを研究対象とし、泥炭の分布・層序

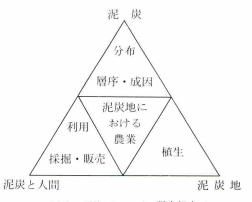


図6 泥炭グループの研究組立て

- ・成因などを探る。地質部門が担当。
- (2) 泥炭地を研究対象とし、主として泥炭地の植生の特徴を探る。生物部門が担当。
- (3) 泥炭と人間のかかわりあいを研究対象とし、ねっこの利用・採掘・販売などを探る。歴史部門が担当。 そしてこれらを、総合化の視点「泥炭地における農業」を中核にして、図6のように組み立てた。

小研究テーマどうしは、深い浅いはあるが互いに関連しあっている。「泥炭の分布」を例にしてみると、

- (1) 「泥炭地の植生」の調査にあたっては、「泥炭の 分布」が判明していなくてはならない。
- (2) どこでどのように「ねっこを利用したか」を知る ことによって「泥炭の分布」の調査に役立てること ができる。
- (3) 逆に「分布」を完全におさえることによって、過去における「利用」の実能を明らかにできるかもしれない。

というような関連が考えられるのである。

d 成果

このグループにおいて、図6に示したような考え方で調査研究を開始したのは1981年5月のことである。 それ以来現在までに各パートで得られた成果は、おおよそ次のようなものである。

泥炭そのものを対象とした研究:泥炭の分布・層序がほぼ明らかになった。それらをもとにして泥炭の成因を検討する過程において、平鹿地方を流れる成瀬川・皆瀬川・雄物川の流路が変遷したという仮説がうかびあがり、これがほぼ証明された。

泥炭地を対象とした研究:当初計画したように植生 を調査するには、残された原野が少なすぎることが判 明した。そこで古文書や古老からの聞き取りなどの調 査を行い、植生の変遷をある程度明らかにすることが できた。

泥炭と人間のかかわりあいを対象とした研究: ねっこの採掘・運搬用具, ねっこ生産地における生産量と消費量, ねっこ消費地における消費料, 泥炭地帯における米の反当収量の変遷などが明らかになった。

実は現在のところ,成果として得られたのは上記の 内容にとどまっており,従来までのいわゆる並列総合 の域を脱してはいない。中核にした「泥炭地における 農業」という視点でこれらの成果を総合していくこと が残された大きな課題である。また視点そのものについても、これがはたして妥当であったかどうかを検討してみる必要がありそうである。

(渡部 晟)

3 雄物川グループ

a 研究の目的

平鹿の生活を考える場合, 雄物川を利用した物資の 流通を欠くわけにはいかない。鉄道開通以前の物資輸 送にとって川船利用は二つの点で有効であった。

すなわち,陸上輸送と比較して輸送費の安いこと, 輸送量の大きいことである。

平鹿で生産された米は雄物川を下り土崎湊で西廻回船を通して大坂へと運ばれた。一方、塩、紙や魚類、衣類などの品々は土崎湊や新屋の商人たちの川船で角間川そして深井へ陸上げされ、そこから内陸各地へ送られていった。このように内陸水路としての雄物川は海上輸送路としての西廻回船を通して天下の台所「上方」に直結すると同時に、平鹿、雄勝、仙北、河辺、由利の5郡の雄物川にそそぐ小河川とも結ばれるものであった。

今日では輸送手段の変化や河川改修などにより雄物 川の持つ役割の一つであった,輸送路としての側面が 忘れ去られている。

本研究では,以上のような理由から平鹿という特定 地域内で雄物川を利用した物資の流通を中心として, 具体的に解明することに主要な目的がある。

b これまでの研究業績

これまで内陸水路をテーマとした研究は比較的少ない。東北地域全域を研究対象とした東北史学会の綜合研究「水運史上の東北地方」(『歴史・第二十七輯水運史特輯号)がある。それ以後,各県で個別研究がさかんに行なわれた。中でも資料の豊富さとあいまって山形県の最上川に関する研究は群を抜く。その他阿武隈川や北上川の研究(最近では,東北歴史資料館の「近世の北上川と水運」と題する展示及びその解説書)が注目される。

これらの動きの中にあって秋田県の河川に関する研究では、その主なものとして

「雄物川通船をめぐる秋田・亀田両藩の確執」 半田市太郎氏(『歴史』三十,三一輯) 「近世後期,雄物川舟運の一事例

調査研究委査会

一生駒氏矢島領内米の川下げー

中谷雅昭氏 (『秋田地方史の研究』)

『雄物川往来誌』 上・下

佐藤清一郎氏

と, 雄物川を中心とした三つの研究があるのみである。

C 研究の視点

前述したように雄物川に関する研究が少なく,解明 されない部分が多い状況の中にあって民俗的視点と歴 史的視点に的を絞り次の5点を調査した。以下,調査 の視点とその結果を述べてみよう。

川船について:調査方法としては,現在残っている 川船の確認,川船の図面や写真の収集,川船道具の調 査が考えられる。

その結果,大正期の川船写真と川船諸道具を調査することができ,展示資料とした。なお,川船の図面をこの地方では作る例がないようであることもわかった。

船場構造の解明:調査方法として,船場絵図の確認, 浜蔵遺構の調査,船場労働力の分析などが考えられた。 その結果,角間川河港絵図(明治6年)の存在により, 浜蔵,大納屋(船頭象の宿泊所),船大工などが具体 的にわかった。

また, 郡内の船場にある浜蔵遺構もある程度調査で きた。

船頭の実態について:調査方法としては各地の地主 及び商人文書の中から丹念に船頭名を拾い出すことで ある。その結果,雄物川町沼館の塩田団平家資料の中 の「舟積帳」(仮称)から幕末期の船頭26名の存在を 確認することができた。

さらに、雄物川町深井の旧船頭宅から船号を入れた 海上安全祈願掛軸とノコギリを資料として確認するこ とができた。

雄物川を利用した物質の流れ:調査方法として、各 地の資料から物資の移動路を分折し、図表化すること である。この中から船場につながる小河川とのかかわ りや酒、紙などの商品の移動を追跡調査することによ り、湧水班との有機的関連性を表現することとした。 その結果、物資がどこの河港を通して出入したかを地 主及び商人文書から解明することは資料的制約からか なりむずかしいのが現状であった。

調査は文書資料を通して判明する物資の動きと、人びとの口伝によるものとに区別する形で行ない物資移

動路を図表化した。

船場に成立した地主の経営分析:この分析を通して、 船場に関連した地主と関連のない地主とで経営内容に 相違点があるかどうかを解明することである。この点 については、地主経営の分析が短期間では困難である ため継続研究とすることとした。

(半田和彦)

4 文化財グループ

「平鹿の文化財」は、展示シナリオ案(1982年4月)の段階で正式に取りあげられたもので、同案では、「中テーマ ⑤平鹿の文化財 中テーマ④(平鹿の心)と共通する側面もあるが、平鹿の人びとが作りあげた文化の中で、とくに有形のものに焦点をあて、平鹿文化の地域性を浮き彫りしようとするものである。○書画 ○宗教遺物 ○陶器」とある。これをベースにして、次のような方針をたてた。

- ①宗教遺物の中で、特に神像・仏像を調査対象とする。
- ②日本の彫刻史の援用による製作年代の判定をする。
- ③②をもとに、その地域の信仰を含め歴史的環境を明 らかにする。

その結果、山内村・大森町をのぞく地域の、12カ寺8社、16個人を調査し、①②については、ほぼ完了した。しかし③の、神体山として、また修験の山としてきこえた保呂羽山、上法寺金峰山、明沢金峰山、東鳥海山それぞれの歴史的変遷の解明については、課題として持ち越さざるを得なかった。

次に具体的な調査事例を揚げる。

雄物川町 蔵光院(不動明王,文政銘鰐口一本庄製等) 宮田神社(阿弥陀如来座像,正徳5年銘伝

鐘, 寬延2年銘鰐口一本庄製)

勢至堂(宝暦年中造像木札)

小野寺家(地蔵菩薩立像)

西光寺(聖観音立像)

造立神社(佐野江洋・小野大凌筆天井絵)

山内家 (不動明王立像, 荼枳尼天立像)

御嶽神社 (懸仏残欠)

金峰神社 (神像)

杉山家(三吉神像)

遠藤家(修験喜楽院文書)東泉寺(聖観音

東泉寺 (聖観音, 地蔵菩薩, 毘沙門天立像)

佐藤家 (鬼神·般若面,獅子頭)

平鹿地域研究の経過

松雲寺 (釈迦三尊像)

阿部家(正徳6年銘不動尊)

島田家 (仏画類)

崇念寺 (阿弥陀如来)

鈴木家(古鏡写,懸仏残片)

蔵伝寺 (釈迦三尊像)

平鹿町 金峰神社(蔵王権現立像)

佐々木家 (黒色尉面ほか諸仏)

明専寺(宝永4年銘伝鐘-横手製)

高橋家 (恵比寿像)

十文字町 護昌寺(五輪塔)

永泉寺(元禄10年銘鰐口,天明4年銘伝鐘 一角館製)

石川家 (奉納神面など)

加賀谷家 (天狗面, 翁面)

米沢家 (仏画)

高橋家(リリ)

増田町 薬師神社(石仏)

内藤家(元禄12年銘阿弥陀如来,宝永5年 銘聖観音,万治4年銘鰐口,五輪塔)

満福寺 (県指定阿弥陀如来立像)

横手市 観音寺(県指定薬師如来立像,十二神将)

旭岡山神社 (県指定御神像,十二神将)

大雄村 重福寺,川崎家

以上,昭和56年2月から昭和57年10月まで,8回の 現地入りがあった。

文化財グループの役割は、展示という実際の場面を 念頭に、「平鹿の文化財」コーナーを充足することに あった。神像・仏像の総点数は20点以上になるが、こ れらを全て展示するには無理がある。そのため、県指 定文化財として既に周知のものと今回の調査でわかっ たものを展示資料として抽出することにした。

まず、神像彫刻として、旭岡山神社蔵2軀、仏像彫刻として、東泉寺蔵2軀(地蔵菩薩・多聞天)・旭岡山神社蔵5軀(伝・十二神将)・宮田神社蔵1軀(阿弥陀如来)・個人蔵2軀(不動明王)をとりあげ、出

陳依頼することになった。

シナリオ及び展示図面の決定までに、「平鹿の文化財」や「平鹿の宗教文化」「平鹿の文化遺産」等々のタイトル案が出されたが、固いとか、むずかしいという意見に屈し、簡単で柔かい「平鹿の祈り」に落着した。しかし、固いとされた文言が具体性を持つにくらべて、「祈り」という表現は、あまりにも文学的であり、方針の③が欠落する以上、無味乾燥な題目に終りそうである。そのため、敢えて、「祈り」の解明を今後の研究にまつことにした。展示がオープンした後も持ち越した課題にそって、地域研究を進めて行こうと考える。御協力いただいた方がた、御迷惑をおかけした方がたに、御礼と御詫びを申し上げる。

(嶋田忠一)

5 トピックグループ

平鹿地域研究は、水についての総合化という視点から、湧水・泥炭・雄物川の3グループに分けて進められた。しかし、展示を考えた場合、現在の平鹿そのものを示すものがないので、平鹿地方を十分に理解させたり興味をもたせたりすることがむずかしいのではなかろうか、と思われた。トピックグループはそのギャップを埋める目的をもって発足した。

このグループでは、まず平鹿地方の米をのぞく主要産物や、古くから伝えられている芸能・信仰、その他焼物・ツツガムシ・雪に関するものなどあらゆる方面のものを取り上げ、展示に活用できそうなものを徐々に選択していくことにした。最初は18項目あげられていたが、最終的に展示に生かされたのはそのうち8項目である。この7項目は「平鹿あちらこちら」というテーマの下にまとめて展示された。

この間の経過をまとめて次ページの表に示した。 [] 内の項目は「平鹿あちらこちら」以外のコーナーに展示として生かされたものである。また直接展示には活用されなかった項目の中で、部門研究として調査研究の進められているものもある。

(嵯峨二郎)

1981年4月	1981年8月	1982年3月	1982年8月
横手・平鹿を往く	横手・平鹿を往く 横手・平鹿の地図 航空写真	平鹿を往く 航空写真	平鹿を往く 平鹿平野と鳥海山 〔導入部ヘカラー写真〕
交通の要所「十文字」 (十文字町)	交通の要所「十文字」 遅々の道標	交通の要所「十文字」 猩々の道標	平鹿の道しるべ 猩々の道標の原像 猩々の道標の版木 徳利
			道標(大雄村野崎) 道標(雄物川町薄井) 写真
鹿島様	鹿島様 雄物川町 沼館、今宿、深井 大雄村,阿気,八柏 平鹿町,浅舞 山内村,黒沢	鹿島様 分布図	鹿島様, 鹿島送り 雄物川 町深井
沼入り梵天 (平鹿町)	沼入り梵天	沼入り梵天	沼入り梵天 平鹿町荒処
リンゴの里 (増田町,平鹿町)	リンゴの里 地形と分布 品種と生産高	リンゴの里 リンゴの歴史	平鹿のリンゴ 平鹿町 伊藤謙吉資料 藤原利三郎資料
ホップ (大雄村)	ホップ	ホップ 裁培の歴史 土壌とホップ	ホップ 大雄村 さく葉標本
スゲ笠 (十文字町)	スゲ笠	スゲ笠 作り方, 種類	仁井田のスゲ笠 十文字町仁井田
ノミ, ケラ (増田町)	ミノ, ケラ	ミノ, ケラ 作り方, 種類	戸波のミノ, ケラ 増田町戸波
芸能	仁井田番楽 芸能発表会 獅子舞巡幸 平鹿町明沢	仁井田番楽 十文字町仁井田	
サクランボ (十文字町)	サクランボ	サクランボ祭り 十文字町	
雪とくらし	雪とくらし ユキッバキ 風力発電 かまくら 山間部と平野部との 比較(家屋用具等)	雪とくらし ユキッバキ 山内村, 横手市 風力発電 平寛町 阿弥陀田 かまくら 横手市	
ケダニ	ケダニとケダニ地蔵	ケダニとケダニ地蔵 分布,羅患状況 雉物川流域	
近世の信仰	近世の信仰 霜月神楽 大森町	近世の信仰 保呂羽山 大森町	
古代集落のあとをたず ねて	古代集落のあとをたず ねて 六ヶ村堰周辺の集落 オホン清水 横手市		
横手平鹿の焼物	横手平鹿の焼物 窯跡群調查 増田姫 増田町 深井焼 雄物川町 中山焼 横手市	深井姥	[深井焼一染物のかめ]
横手平鹿の画人	中田 不	平鹿の文化財へ	平鹿の文化財へ
貝化石 (山内村) (平鹿町)			
鉱山 吉乃鉱山と カドミ汚染			